

保育実習生の達成感・満足感の構成要素と事前・事後指導の課題

中野 菜穂子

Composition at the Feeling of Achievement And A Problem of Guidance on the Practical Study of Child Care Students

Nahoko NAKANO

要 約

保育士への社会的期待が高まる中、養成教育の改善・充実が望まれている。2000年・2001年・2003年において保育実習（1年次：入所型施設実習）終了直後の本学保育学生にアンケートを実施してきた。データが3年分蓄積されたことから、一定の傾向・方向性の評価が期待できると判断し、集計した結果を報告する。

実習に対する達成感・満足感は、施設利用児・者とのふれあいや施設の姿を学べたという直接体験に主に支えられている。未達成感や不満感についても、援助の未熟さや体調を崩したことなど、直接的なかかわりがうまくできなかったことが理由として多くあげられていた。事前指導においては、先輩の実習体験から学ぶことへの評価が高く、対応方法や施設職員の特別講義など、具体的に実習場面に生かせる指導の強化を求めている。直接体験の具体的成果を重視する学生の要望にこたえるような個別的・具体的指導を充実させると同時に、援助にかかわる視野を広げてゆく事前・事後指導が必要である。

キーワード：施設実習 達成感・満足感 未達成感・不満感 事前・事後指導

1. 問題の所在

保育士養成教育課程が2001（平成13）年に改正され、同年11月には保育士資格を法定資格とする児童福祉法改正が行われた（2004年11月より実施）。保育士への社会的期待の高まりをめぐっては以下の3つの視点からまとめることができる。

まず、被虐待児や発達障害児など、社会や家庭での適応が難しいケースの増加である。質の高い保育・児童養護が望まれており、それを可能にするための個別的ケアの実施が主張されている¹⁾。第二に子育て支援を担う専門職員としての期待である。保育所をはじめとする児童福祉施設には、家庭・地域での子育て機能そのものへの援助も求められており、従来、児童の保育を専門としてきた保育士も、親への指導を行うことが法定化に伴いその職務に加わっている。第三に子どもの権利擁護の保育・養育への具体化である。2000年の社会福祉法により、苦情解決や第三者評価システム

の導入もその一環である。保育や養護の内容についても、権利擁護を基本にした発達・自立援助が求められている。

保育士養成教育課程では、保育所および保育所を除く児童福祉施設等で保育実習を行うこととされている。実習の目的については厚生労働省通知「保育士養成所における保育実習実施基準について」において、「保育実習はその習得した強化全体の知識・技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする」と定められている。保育実習は実習体験を通じて実践と理論を統合し、実習生自身の児童観、保育観、福祉観の形成が促進され、今後の学習課題や研究課題の明確化や職業選択の参考にすることもできる、貴重な学習である²⁾。

こうした重要な意義を持つ保育実習の教育効果向上のために、事前・事後指導の充実はきわめて重要である。本学の保育実習は、1年次後期に保育所を除く児童福祉施設等において10日間泊り込みの実習からスタートする。実習終了後の学生からは「よかった」「ためになった」という感想がよく聞かれる。一方では、「難しかった」「うまく行かないうちに終わった」という反応もある。これらの感情を構成する要素を検討することにより、事前・事後指導の充実に向けての示唆や課題が得られないだろうか。

本稿は、実習終了直後の学生に対するアンケートの集計とその集計結果からの考察の報告である。今後、詳細な検討を行い、事前・事後指導の実践とその効果測定等、教育実践向上とその研究に結び付けてゆきたい。

2. 方法

保育実習終了直後の学生に対してアンケートを実施した。対象は2000年・2001年・2003年の保育実習生である（2002年は筆者休職のため、実施していない）。アンケートの内容は①実習に対する達成感・満足感を感じているか②達成感・満足感を感じる学生にその要因（LA=3）③実習に対する未達成感・不満感を感じているか④未達成感・不満感を感じる学生にその要因（LA=3）⑤事前指導で役立ったことがら（LA=3）⑥事前指導で強化してほしいことがら（LA=3）⑦自由記述である。アンケートは記名方式としたが、指導の充実のために実施するものであり、回答内容は実習評価とは一切関係ないことを実施に先立って述べ、率直な回答を促した。回収はその場で行ったため、回収率100%であるが、実施時に欠席していた学生が若干名いるため、回収数は2000年度50、2001年度46、2003年度50であり、回答総数は146である。

アンケートの集計と、自由記述の分析から、実習生の実習および事前事後指導に対する評価を導き、事前・事後指導への課題を考察する。なお、年度により、集計結果には幾分のばらつきがあるが、有意な差とは認めがたいため、年度による比較検討は行わず、共通する傾向としての側面を重視して検討した。

3. 結果および考察

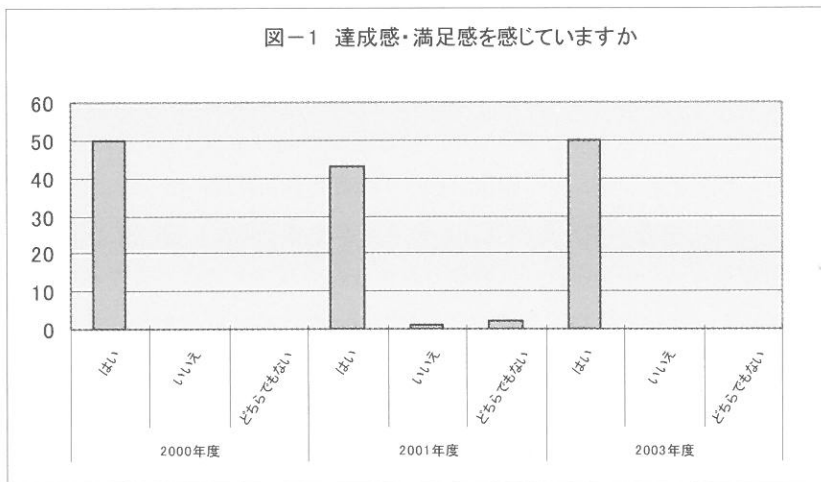
(1) 達成感・満足感について

実習終了後のアンケートでは、ほとんどの学生が達成感や満足感を得ていることがわかる（図－1 参照）。

達成感や満足感を感じる理由として、以下、12の選択肢を用意し、3つまで選択させた（図－2 参照）。

1. 長期間の実習をやり遂げたこと、2. 施設利用児・者と触れ合えたこと、3. 施設について学べたこと、4. 利用児・者への援助を学び、実践できたこと、5. 施設職員から指導や助言を得たこと、6. 友人と励ましあえた、7. 利用児・者の実際の姿が学べたこと、8. 日誌や記録の取り方がわかった、9. 事前学習が生かされた、10. 施設観・福祉観が変わった、11. 自分の進路、職業選択を見つめなおせた、12. その他。

実施年度によって若干の差はあるものの、「2. 施設利用児・者と触れ合えたこと」や、「7. 利用児・者の実際の姿が学べたこと」が多く選択されている。さらに「5. 施設職員から指導や助言を得たこと」や、「10. 施設観・福祉観が変わった」、「4. 利用児・者への援助を学び、実践できたこと」についても選択されている。直接体験の重要性とそれからの学びへ支持が高いことが伺える。

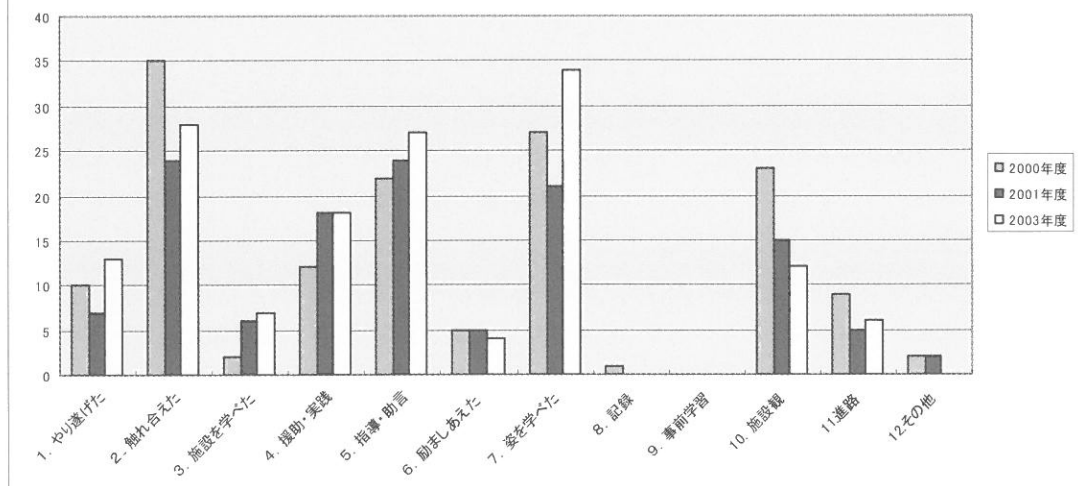


自由記述には以下の様な記述があった。

- ・ 幼い子にも一人ひとり人格・個性があり、ちゃんと要求を持っているんだと改めて感じました。毎日少しずつ深まっていく関わりを体で感じ、とても充実した実習ができました。(2001年度 T,A)
- ・ 今回の実習で今までの自分の施設観・障害者観が全くといっていいほど変わりました。今までは偏見など自分の中にはないと思っていたが、実際に接してみるとどこかで特別視していることに気づきました。初めのころ、あまり利用者の方と関わる事ができず、悩みました

がそれはやはり特別視していて自分のほうから関わりにくくしていたんだなと思いました。また利用者の方から学ぶことも多く、人間の本質や基本というものを実感することができました。(2000年度W,M)

図-2 達成感・満足感の内容(LA=3)

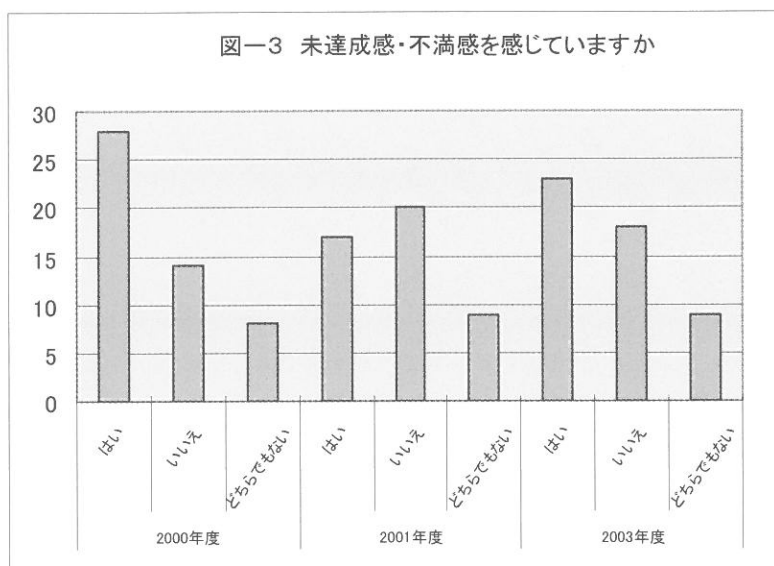


- ・ 本当に短い10日間だった。生徒や職員の方から学ぶものがとても多く、たった10日間で少し変わったし、これからもっともっと変わっていけるような気がする。これほど学べた10日間は今までなかったような気がする。実りあり、一回り成長できる実習になった。(2003年度U,H)
- ・ 今回の実習を終えて本当にたくさんのことを学ぶことができた。利用児と接する中で対応に困ることは何度もあったがそのたびに職員の方からのアドバイスなどを参考にしながら自分なりに対処していくことができた。失敗したこともあったけど、そこから「何がよくなかったのか」「どうしていればよかったのか」と考えることで次に生かしていくことができた。(2003年度K,R)
- ・ 実習を終えて障害者の方々へのイメージが大きく変わった気がします。以前は少し怖いというイメージがあったのですが、今はそんな気持ちはなくなりました。利用者の方々はとても明るくて、10日間楽しかったです。介助など貴重な体験をさせていただいて勉強になりました。(2001年度M,T)

これら自由記述からも、実習での経験の拡大と、そこからの認識の変化が実習生にとって実習の成果を感じさせ、達成感や満足感を感じさせる要素になっていることがわかる。初めての实習で得られた達成感や満足感、今後の学習活動への動機付けに連動してゆく価値を持っているであろう。特に、直接的なふれあいや援助活動からの学びや、施設観、福祉観の深化は保育学生の特長的自己形成の上で重要な要素となる。積極的に評価・支持し、今後につなげてゆく指導が求められる。

(2) 未達成感・不満感について

「実習に対して未達成感・不満感を感じていますか」という問いに対しては2000年度に「はい」という回答が多いものの、2001年度と2003年度は「いいえ」と「どちらでもない」をあわせると、明確に「はい」と答えた学生数を上回っている結果となった（図一3参照）。実習終了直後のアンケートであり、まだ実習行動を冷静に振り返っていない時期であったことも影響しているだろうが、この時点では、達成感や満足感のほうが強く意識されているようである。しかし、達成感や満足感と同時に、未達成感や不満感を感じている学生もいる。達成できたところと未達成だったところを振り返り、実習のまとめや今後の課題の明確化につなげてゆく指導が求められるであろう。その意味では、むしろ、未達成感や不満感を感じていない学生に対して、満足できる実習だったことを積極的に評価しつつ、不十分だったところを冷静に振り返ることのできるような指導も求められてくる。

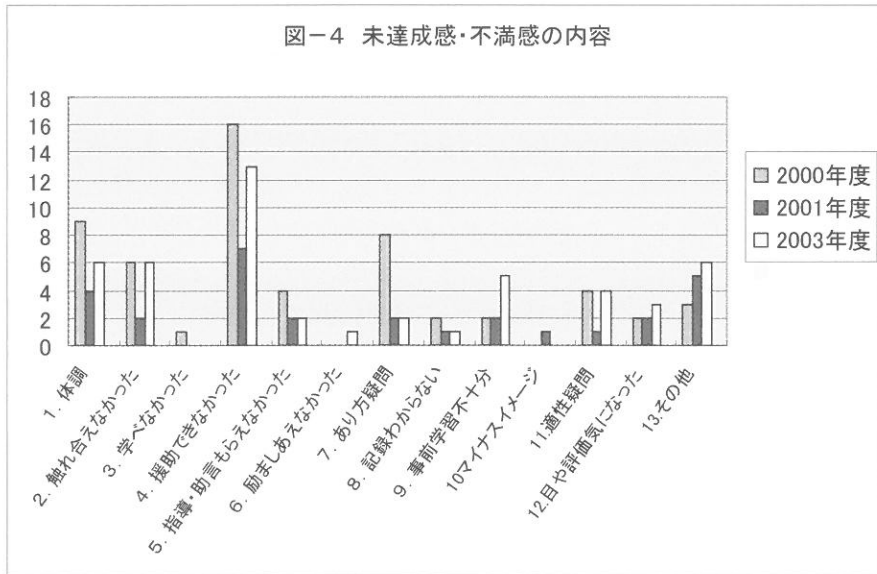


その未達成感や不満感の内容については以下13の選択肢を用意し、3つまで選択させた。

1. 体調を崩した、
2. 施設利用児・者と充分触れ合えなかった、
3. 施設について充分学べなかった、
4. 利用児・者への援助がうまくできなかった、
5. 施設職員からの指導や助言がもらえなかった、
6. 友人と励ましあえなかった、
7. 施設や職員のあり方に疑問が生じた、
8. 日誌や記録の取り方がわからなかった、
9. 事前学習が不十分だった、
10. 施設間・福祉間にマイナスイメージが加わった、
11. 自分の保育士への適性に疑問が生じた、
12. 周囲の目や評価が気になってうまく振舞えなかった、
13. その他。

その結果を図一4に示す。これを見ると、群を抜いて多いのが、「4. 利用児・者への援助がうまくできなかった」である。続いて「1. 体調を崩した」、「2. 施設利用児・者と充分触れ合えなかった」や「7. 施設や職員のあり方に疑問が生じた」といった項目が選択されている。先に見た達

成感や満足感の内容でも直接的な体験に基づく項目が多く選択されていたこととあわせ、実習生は実習ならではの直接体験、施設利用時・者とのふれあいや援助に実習の意味を見出し、達成感や未達成感の根拠にしていることが推察される。体調を崩すことは、実習活動の妨げとなるため、悔いの残る要因となるのであろう。



回答数全数（146）から見ると3年間をあわせて一割未満であるとはいえ、「施設や職員のあり方に疑問が生じた」と感じる実習生もいる。10日間という切り取られた短期間で、施設および職員のあり方を判断することは軽率であろうが、丁寧に実習生の話を聞き、疑問を解消したり、よりよいあり方を考察させる個別的指導が必要であろう。

自由記述では以下のような記述が見られた。

- ・ 「もっと積極的にしてほしかった」と最後に言われ、「積極的」というのがわからなかった。本当に施設の忙しさがよくわかった。職員さんもおられないで子どもと触れ合う時間が多く、どうしてよいかわからなかった。（2001年度T,M）
- ・ 実習を終えた今、満足感を感じているのと同時にもっとこうすればよかったと反省するところもたくさんあります。そのときは気づいてあげられなかった子どもの気持ちを実習が終わったいまさらながら考えてしまいます。先生方、子どもたちに助けられながらの実習でしたが、私なりに成長できたのではないかと思います。（2000年度N,Y）
- ・ 担当の先生との話し合いがあまりなかったことが残念でした。どこまでたずねたらいいのかわからなくてあまり質問できませんでした。（2000年度Y,M）
- ・ 忙しいのも十分理解できるし、実習生のために時間を割く余裕がないこともよくわかる。が、ほとんどかまってもらえなかったし、自分では一生懸命やったつもりでもあとから考えたら、

職員の方が言われたように、「積極性が足らなかった」のかもしれない。(2000年度M,I)

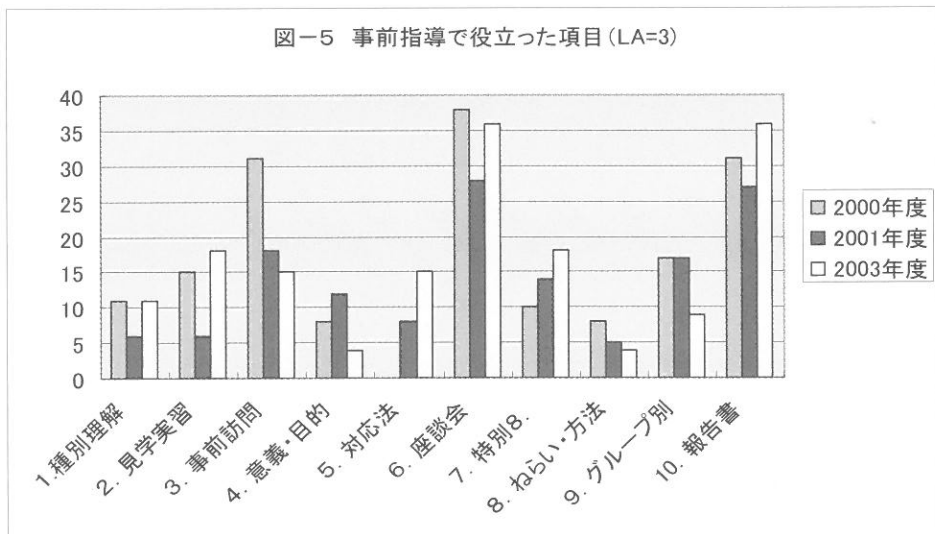
施設職員の指導に学生が大きく期待していることが伺える記述が見られる。施設利用児・者の抱える問題が複雑化していることもあり、施設はかなり多忙な状況にある。そうした中でも後継者養成のために多大な労力をさき、実習生を受け入れている。施設側にこれ以上の指導体制の充実を求めても直ちに体制が整うことはむづかしい。利用児・者の状況によっては実習生への指導がタイミングよく実施できない場合もあろう。こうした状況下では当面、職員に依存しすぎない実習生の問題解決能力の形成が必要だが、こうした能力は実習を通じてこそ形成できるものである。実習の事前指導でその端緒だけでも得させるためには、ロールプレイやシュミレーションを盛り込んだ指導内容の充実を検討すべきであろう。

(3) 事前指導の課題

「実習の事前指導の中で役立ったもの、もっと強化してほしいもの」をそれぞれ3つずつ選んでくださいという問いのもと、事前指導の項目を列挙した。項目は以下10項目である。

1. 実習施設種別理解、2. 見学実習、3. 事前訪問、4. 実習の意義・目的の講義、5. 子どもへの対応法についての講義、6. 先輩との座談会、7. 施設職員の特別講義、8. 「実習のねらい・方法」の指導、9. グループ別の個別指導、10. 先輩の報告書。なお、これら事前指導の項目の中で「5. 子どもへの対応法についての講義」については、2001年度から取り入れた項目であるため、2000年度についてはデータがない。

まず、役立ったものについては以下のように回答されていた(図-5参照)。

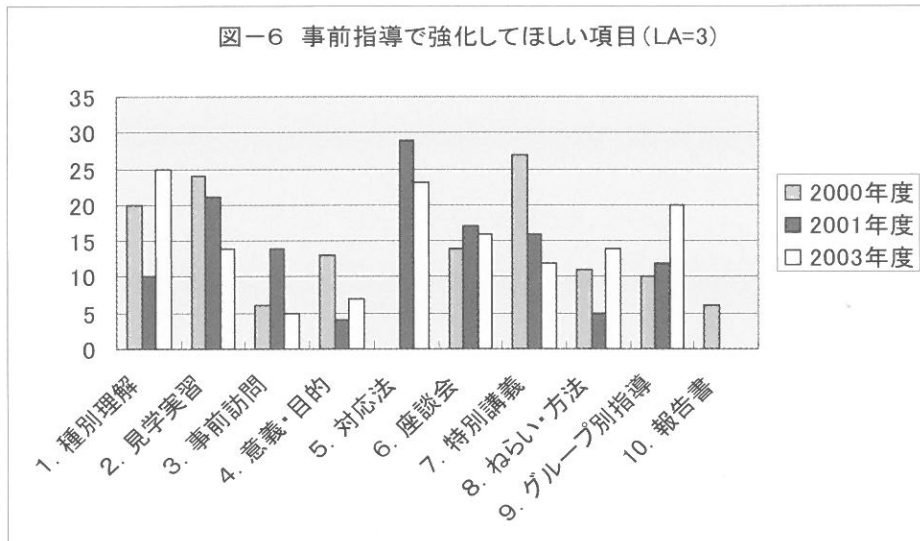


多く選択されているのが、「6. 先輩との座談会」と「10. 先輩の報告書」である。実習の事後指導の重要な柱として、実習報告書を作成させ、翌年の実習生にも読ませている。また、実習事前訪問のころに昨年の実習生(2年生)との座談会を行っている。例年、ほとんど同じ施設に実習を依

頼しているため、同じ施設で実習した先輩の報告書や直接聞いた話しは、実習のイメージを形成したり、不安や疑問に答えるものとなり、役に立ったという実感を実習生に与えるものとなっているようだ。そのほかでは、「2. 見学実習」、「3. 事前訪問」、「7. 施設職員の特別講義」や「9. グループ別の個別指導」が選択されている。直接施設に行ったり、現場職員の話聞く内容、または個別・具体的指導ができる事前指導項目が選択されている。

一方、強化してほしい項目としては以下のように回答された（図－6 参照）。

まず、「2. 見学実習」、「1. 実習施設種別理解」、「7. 施設職員の特別講義」、「5. 子どもの対応法についての講義」が多く選択されている。「6. 先輩との座談会」、「9. グループ別の個別指導」、「8. 『実習のねらい・方法』の指導」がこれらに続く。施設見学や職員の講義または先輩との座談会という、大学が直接的に話を聞いたり、施設への具体的理解を深める「場」を提供するものへの要望が多い。これらについては場や機会の提供回数を多くしたり、内容の充実を図ることが検討されるべきであろう。これ以外の、指導担当者に求める項目としては種別理解や対応法、グループ別指導など、やはり具体的指導が望まれており、直接的・具体的に実習先の選択や実習行動に役立つ事項を求める傾向が強いことが伺える。



自由記述に事前指導に関連する記述があったものを以下に示す。

- ・ 事前に学んでいったことによって理解できたこともあり、準備は重要であると感じました。ただやはり、知識など事前の学習では学べないこともたくさんあったので、実践に基づいた施設で働いていらっしゃる方の講義や先輩方とのお話しが役に立ったと思います。（2003年度S,N）
- ・ 事前学習で、自分が施設に行き、具体的にどのような活動をするのかがわからなかったもので、そのあたりをもう少し知っておくともっといい活動ができるかなあと思った。（2003年度W,M）
- ・ 現実を見たという気がした。虐待を受けていた子の大人を信頼していないという気持ちがず

ごく伝わってきた。もっと自分自身、いろいろ知識を身につけておくべきだと思った。(2000年度D,M)

今回のアンケート集計からは、実習生が直接的具体的な成果や指導を、実習と事前指導に求める傾向が明らかとなった。実習は、大学で学んだことを踏まえて実習によってそれらを実際の場面で主体的実践的に結び合わせて理解を統合し、実践者としての自らの資質をも問いながら、福祉を総合的に学ぶ役割を持つ³⁾という意義を持つ。こうした意義を実習生自身の学びへと具体化してゆくことが重要である。直接体験の達成感をより得てゆくために、具体的指導の充実と、援助をめぐる保育者の倫理や援助の質および条件など、実習生自身の視野を広げてゆく事前・事後指導が求められる。

参考文献

- 1) 社会保障審議会児童部会、「社会的養護のあり方に関する専門委員会報告書」、2003年
- 2) 新保育士養成講座編集委員会編、『保育実習』、全国社会福祉協議会、2002年
- 3) 宮田和明他編、『三訂社会福祉実習』、中央法規、1998年

2004年10月31日受付
2004年12月25日受理